

「信じる」ことの認識論的二重構造

— 情報社会を支える信用・信頼 —

近 藤 良 樹

【キーワード】 信頼・信用・信じる・無知・真実

1. 信頼の社会

信頼・信用は、社会生活に不可欠である。信用できないひとに会計をまかせることはできないし、かれのことばは、しっかりした裏づけがないかぎり受け入れられることはない。信じられなくなった人たちとの社会生活は困難になる。現代社会は、情報社会と特徴づけられるが、ここでは、情報の真偽が、その信頼性が重大な問題となる。信じられない情報は、いくらたくさんあっても、なんの役にも立たない。信頼・信用に裏打ちされている情報のみが有用なものとなる。

封建社会では、遠くの都市の商人の活動やその情報への信頼など不要であった。かりにかれらと交わる必要のあるときには、「商売人は必ずうそをつく」と警戒して安易に信用することはなかった。しかし、われわれは、遠くの、しかも会うこともないようなひとびととの信頼関係をふまえて生活している。したがって、ときには、信頼を撤回してこれを疑うことにとかりたてられる。猛スピードで車を走らせて安心できる前提には、自動車製造会社やその関連の無数の会社への信頼がある。外国の食料品をなんのためらいもなく食べることができるのは、その生産者や仲介業者を信用しているからであろう。現代は、資本主義の世の中であり、お金が中心になっている社会である。その中枢を担うのが銀行になるが、ここでは、信用・信頼の問題は、その銀行の存亡にかかわる大問題となる。仮に、その銀行への信頼・信用が崩れたとすると、だれが預金をそのままにしておくであろうか。この社会は、信用や信頼なくしては成立しない。わが国は、高度に信頼関係が確立されている社会だと評価されている。豊かな自然とともに、われわれには、当然のように豊かな社会的な信頼関係が与えられている。

だが、世界には、信頼度の低い社会関係しかもてないでいる地域が少なくない。崩壊後の旧社会主義諸国で大きな問題になっているのが、社会生活上の信用・信頼の低さである。当然ながら、その国家機関への信用度は低い。相互の経済的な結びつきも、高い信頼関係をふまえてのものにはなりえないままである。そういう社会と、いまやインターネット等で、我々自身も直接にかかわりをもつことになってきているが、このインターネットはというと、その情報は、豊かで多彩だけれども、信頼度からいうと、問題となるものも少なくない。玉石混交のインターネットの情報は、無批判に信じることはできない。われわれは、それが真実なのかどうか、信じてよいのか、

疑うべきなのか、慎重に考えなくてはならないことになる。ここでは、信頼・信用というものが重大な問題となる。

より緊密に世界の諸社会と共生する時代にはいりつつあるわれわれは、もっと信頼をもち、信じあえる体制を作り上げていく必要がある。では、そのいう信頼・信用、つまりは、「信じる」とはどういうことなのであろうか。筆者は、「信じる」ことを次のように捉える。「信じる」とは、無知にとどまる肝心なことがらについての所与の情報をふまえ、これへの懐疑を停止して、まちがいないものとして受け入れ、これに賭け、任せようという人知のふるまいであると。まずは、本稿では、この信の認識論的な根本構造について、つまり、無知・不可知の肝要な物事と、それについての所与の情報という二重構造に限定して「信」を論じることとする。

さて、「信じる」ことの構造を反省するための材料として、ギリシア神話から一つの話をあげておこう。オルフェウスとその妻エウリュディケーの話である。毒へびにかまれて死んでしまい黄泉の国にいったエウリュディケーをこの世につれもどすために、オルフェウスは、黄泉の国ハデスにおもむいた。そして王ハデスと王妃ペルセポネをして、その豎琴と歌声で感動させて、エウリュディケーを復活させることに同意させ、つれて帰れることになった。ただし、彼女はオルフェウスのあとをついていくが、決してこれを振り返って確かめることをしてはならないと、彼は王からいわたされた。この地上世界へ帰る途中、エウリュディケーは音ひとつ立てることなくついてきていたのだったが、オルフェウスは、本当についてきているのかと不安になり、ハデス王のことは信用しきれず、とうとう振り返って確かめてしまった。そのとたん、エウリュディケーは、ふたたびハデスへと落ちていってしまい、二度と地上に復活することはならなかったというような話であった。人にとって「信じる」ことがいかに大切で、かつ、「信じる」ことが場合によってどんなに困難かを物語ってくれている。

オルフェウスがハデス王のことは信じきれなかったとは、つまり、これを疑って、つい、ふりかえってしまったとは、この王が「うそつき」なのかも知れないとか、「いいかげんなことを言ったのではないか」等と、王を悪しき心性の持ち主と疑って、低く評価していったということである。仮に王を、全面的に信頼できる高邁な人物と評価していたのならば、オルフェウスは、信じられなくなって振り返ることなどしなかったにちがいない。オルフェウスが、信じることができなくなったということは、王からいうと、その人格が低劣に見積もられたということである。エウリュディケーは本来的には生き返ることはできない死者であるのに、ハデスの王と王妃は、なさをかけ無理をして生き返らせることにした。その恩にオルフェウスは、あだでむくいることをしたのである。エウリュディケーが二度と蘇ることができなくなったのは、やむを得ないものがあつたというべきである（こういうとオルフェウスが疑い深い愚かしい人物であるかのようだが、それは、すこし酷な見方である。死者は、死んだ以上決してよみがえることはない。死者を蘇らせる願いは、決してかなえられない。このたぐいの話は、いつでも、蘇らせようとして失

敗する話になる)。

2. 無知に留まる肝心なことがら

信じたり疑ったりするのは、われわれに直接的には知られていない大切なものごとがあつて、かつこれについての(間接的)情報は、直接与えられているという場面でのことである。その情報の指し示す元のものについては直接的には無知・不可知にとどまっているということが大前提になる。オルフェウスの場合、明言されたハデス王のことばがあり、これの指し示すものとしての「エウリュディケーのついてくること」は、知ってはならない、見てはならないもの、無知の状態にとどまらねばならないものであった。信じるということは、この無知を前提にするが、それは、知ってはならないという禁止をいうのみではなく、他方では、知り得ないもの・不可知のものになっている場合もある。「神を信じる」というが、神の存在そのものは、到底ひとには知り得ない超越的なものであり、この決して知り得ないものについて、その存在を信じるのである。いずれにしても、信じることの根底には、知ってはならない、あるいは、知り得ないという、「無知」にとどまる状態があるわけである。

不可知といえ、未来は、過去とちがひ、本質的に不可知である。未来については、ひとには、信じる以外にないということが必ずつきまとう。社会生活は、時間のなかで展開され、明日の、未来に属する約束の話になることがしばしばである。信じることが常々もとめられる。信頼・信用が大きな問題となる。

しかも、この無知にとどまるものは、当のひとにとって、重要な価値・意味をもっているものになる。われわれの知は、有限であつて、なにもかも知ろうというのではない。人知にとってどうでもよいようなものは、これに無知であつても、問題にはならない。これを信じるとか疑問を持って解明の努力をしていくとかというようなことにはならない。信じるといわれるときのその無知にとどまっているものは、ひとにとって重要な価値があつて何とかして知りたいもの、知る必要のあるものになっているのである。

オルフェウスは、エウリュディケーが後をついてきてくれているのかどうかについて無知にとどまっていて、それは彼には肝心要めの事柄になっていた。ほかにも、無知にとどまっている事柄は無数あつたであろうが、それは、信じて受け入れる必要のあるものではなかつた。信じること・疑うことは、肝心なものごとへの、知る必要のあるものへの無知の状態をふまえているのである。

「うそか、本当かはっきりさせたい」という肝心の事態があり、その真偽については確かめえず無知にとどまるということがあつて、これを信じるとか、信じないということになるのである。どうでもよいものは、うそでも本当でもいい。これが問われるのは、重要な、肝心なことがらとみなされているものについてである。それは、大きな危険性のあるものであつたり、すばらしい

喜びの可能性になるものであったりという重要なものになる。直接的に所与の言動のもとに、その背後に重大な真実があるのだが、これが直接的には知られないでいるとか、あるいは、見てはならない知ってはならない等と、無知・不可知にとどまっているということが、信不信のもとには存在している。ひとの内心にせよ、超越的なものにせよ、未来のことにせよ、人知の及び得ないところがある。人の直接的な知を越えたところに、しかも、これを何であるか知りたいという要求のあるところに、信の領域はひろがっている。

オルフェウスの場合、エウリュディケーがあとをついてきているかどうかという肝心かなめのことは、知ってはならないもので、かれには、隠されているものであった。もし、かれがそれを見てもよいのであれば、ハデスへの信は、不要であった。知りえたものは、見て確かめえるものは、疑いを不要にするとともに、同時に信じることも不要とする。オルフェウスが振り返り見て確かめたとたんに、知ったとたんに、その「信」はおわることとなった。肝心なものが隠されていて不可知・無知にとどめられるところに、信は成立する。もちろん、隠されるのは、しばしば知ることが否定的な結果をもたらすからで、不幸をまねくから「知ってはならない」と禁じられるのであった。

未来のことは、それが未来にあるかぎりには、知ることでできないものに留まる。それが見られるものになり、知られるのは、現在のものになることによってである。信じることは、この場合、あくまでも、未来に隠されていて知られない限りにおいて可能となっている。この信は、その未来が現在となって、見知られることになったとたんに消失する。「15日にはお金を返す」という約束は、信じられるし、疑うこともできる。そして、「15日」になった時、信も疑も不要になる。お金を返してくれた、あるいは返さなかったという事実を了解・認識するのみである。知りえたところでは、「信」は、そして「疑」も、不要になって消失する。知られるものは、信じることはない。知ればよいのである。ひとは、知ることができないから、信じるのである。

信と知は、対立するとよく言われる。信じることが成立するためには、知られないで信じられる以外ないということがある。知ることのかわりに信じるということになる。それは、一方では、知がそれ以上いくら努力してみても、新しいもの・確かなものを得ることができないということであり、他方では、知りうるのだが、これをやめて、あえて無知にとどまるということである。前者の場合、知は、おのれの無力を自覚して、信にとゆずる。それは、信じられるひとの知をうけ入れることとなって、知の高まり拡大となっていく。それは、知のぎりぎりのところで飛躍・飛翔して、信へと昇華することである。

だが、後者の場合は、これがオルフェウスの信でもあったが、知が、みずからの解明を放棄・停止することを前面に出したものである。われわれは、ホモ・サピエンス(知のひと)として、知ることへの強い欲求をもっている。知にリードされて、われわれの生はなりたっている。当人にとって大切なことがあって、それが当人にはなお知られえないでいることが分かれば、かれは、

必死になってこれを知ろうとすることであろう。かりに、それを知ることになると、不幸になると分かっている、おそらくは、これを知ろうとするのが、われわれホモ・サピエンスである。ところが信は、場合によっては、この不可知・無知にひとをとどめようという働きになる。信じるべきものとは、重要な肝心かなめのものごとであり、しかも、それは、知られない、知ってはならないものである。肝心なものごとへの無知の状態があるというのであるから、知性は、静かにしておれず、これを知ろうとする。つよい知への欲求がかきたてられる。だが、信は、この欲求を押しとどめて、知的な機能を停止することを求める。知ることが禁止される。ここでは、知性は、禁止にあって、ますます、欲求不満となる。「大切な、知るべきことがあり、しかも、それを知るとは、お前には禁止されている」というのであるから、空腹の者がおいしい食べ物を前に、おあずけさせられているのと同じ、つよい欲求不満に、知性はおかれることになる。このとき、知ることができると、知性は、満たされるが、それで信は終わりとなる。そして、知ることが禁止されていた場合、おそらくは、知ることが不幸を招くからという善意で禁止されていたであろうから、オルフェウスのように不幸を自らがまねくことになっていくのである。

3. 無知に留まるものを指し示す情報の存在

肝心なものへの無知は、そのことについて何のてがかりもなく、その有無すらも知られないでいるというのであれば、関心の対象そのものにならず、これを信じるとか疑うということにもなっていない。信じようにも、その信じるべきものが皆目不明なのは信じようがない。疑う当の対象なり情報がなくては疑いようがないのと同じである。信じるべきものについての何らかの情報のあることだけははっきりしている。

信じるという場面には、ある無知のものについての、与えられている間接的な知がある。無知にとどまる重要なものについて、これを指し示す情報・表現があり、この情報は直接知っているのである。信じるのは、この表現されているもの・提示されている情報をふまえて、この情報とその内容を信じるのである。その内容が、無知にとどまる肝心なもの「真実を語っている」とうけいれるのが信じるということである。

オルフェウスでいえば、かれが信じるべきであったのは、ハデスの王の「ことば」であった。無知にとどまらねばならない、エウリュディケーがついてきていることについての、王の言葉があり、このことばをかれは、信じなくてはならなかったのである。無知にとどまることがら、王の内心、それは、ことばとして表現され、情報が提示されていた。このことば・情報が内心そのものに一致している、うそではなく本当をいっていると、信じるのである。

「疑い」は、このとき、そのことばは、真実とは異なっているのではないか、うその情報なのではないかと、このことばを留保し、受け入れをためらい、なかば否定的態度をとるところに成立する。

信じるべきことばなり表現・言動があって、それが表現している元のものは、信じる者には無知にとどまる、直接的には知りえない重要な事柄になる。元々のこの事柄と直接に結びついているのは、その信じられる言動である。信じる者は、この言動は直接的に知っていて、その表現する内容・もとの事柄とは、その言動によって、間接的に結ばれている。否定的に言えば、もとの事柄とは、その中間の信じるべき言動によって、分断され、直接的なかかわりは存在しなくなっているのである。

ひとの言動が、内的に屈折するものでないのであれば、もともとの事態は、そのままに表現されて、これがもとの事態をちゃんと提示しているのかどうかと疑ったり、信じたりすることはない。だが、人は、その内心にいただくことと、そとにそれを表現することを別にすることができる。うそがつける。したがって、うそか否かと懷疑することが必要となる。

あるいは、もともとのものをいつわるつもりはなくても、誤ることもある。右にあるものをそのままに左に移すのであれば、問題は生じないが、ひとの言動は、一たんはこころのなかに取り込み、解釈して、これをふたたび、そとに表現していくものである。したがって、こころにとりこむとき、錯覚などの誤りとなり、解釈は誤解となり、さらに、それをそとに表現するときは、うそをついてだますことがあり、受けるものは誤解し曲解する。幾重にももとのものをゆがめるプロセスをもつ。その言動は、指し示すもとの対象について、そのままを再現するというにはならない。所与の言動が真に指し示すもとのものを表現し伝えてくれているものかどうか、信じる者には不明なのである。うそではないにしても、誤っている可能性があり、これを吟味することが必要になるが、そのとき、疑うことをあえて停止して、受け入れる決断をするのが、信じるということである。

あいまいで疑わしさのある間接的な情報など避けて、直接的に与えられる知によって生きれば、これは、確かな生活となりうる。しかし、それでは、われわれの生活は、極端にせまいものになってしまう。間接知は、直接知のような確かさはないが、それのみがひとの知的な世界を広げ、情報を飛躍的に拡大する。直接に知ることでできるものだけに情報を限定していたとすると、われわれは、それこそ井の中の蛙となる。

ところで、プラトンは、その『国家(politeia)』(第6巻、第7巻)で、知を、明確さ・真実度の違いから見て四種に分けた。線分の比喻・洞窟の比喻といわれているものがそれで、まず大きく二つに分ける。それは、太陽輝く昼のイデア的真知の世界と、暗い洞窟の中の感覚的個物的な迷妄の世界への二分であった。さらに前者、真知は、真実性、明確性に十全な英知(ノエーシス)と、これに不足のある思考(ディアノイア)に分けられる。後者、迷妄の世界も二分されて、暗い不分明な世界において、なおその度合いの少ない信(ピステイス)と、迷妄そのものの臆測(エイカシア)が区別された。

プラトンにおいては、信(ピステイス)は、真知の昼の世界にいたる手前の暗い洞窟のなかの

迷妄の世界にとどまるものであった。だが、最低のエイカシアーからいうと、迷妄のなかにあっても、影のもとになる実物を見る、その意味でおそらくは確信のいだけの知なのであった。

カントも似たような区別立てをしている。その『純粹理性批判』は「臆測・知・信について Von Meinen, Wissen und Glauben」において、「臆測は、意識に主観的にも客観的にも不十分な真把持 *Fuerwahrhalten* で」、信は、「単に主観的にのみ十分で、同時に、客観的には不十分と見なされている」ものになり、知は、「主観的にも客観的にも十分な真把持」になるという（Immanuel Kant; *Kritik der reinen Vernunft*. A822=B850）。主観的に十分という「（私自身にとっての）確信 *Ueberzeugung* (*fuer mich selbst*)」(ibid.) が信だというのである。

プラトンもカントも「信」を、真の知にいたる手前の、それから一段低いものとして位置づけた。信は、主観的には確かと感じるが客観的に不確かで、曖昧なものにとどまる知なのであった。信のもとでの情報は、われわれの知を拡大してくれるけれども、それ自体は、不確で、真か偽かがはっきりとは検証できないものにとどまる。信は、検証のできない間接知にとどまる。カントやプラトンが、「信」を「知」の一形態とし、かつ、確かさについては、真の知よりは一段低いところに位置付けたのは、穏当な「信」の取り扱いになるであろう。

4. 信の認識論的二重構造 (S—M—O)

信じるという場合、まず、信じるものに直接与えられている信じるべき情報があり、その情報の内容としての、情報の指し示すもとの肝心かなめの、隠されたり不明で、無知・不可知にとどまる、信じるべきものがあることになる。「オルフェウスは、エウリュディケーが後をついていくというハデスの言葉を信じた」のである。つまり、「ひと(S)は、無知にとどまる肝心のもの(O)についての、所与の情報(M)を信じる」ということである。信じられるべき不可知・無知にとどまる対象(O)と、信じる者(S)のあいだを、信じるものに直接的に与えられている情報(M)が、媒介するのである。

信じる者(S)は、情報(M)と、その指し示すもとの対象(O)という二重構造を自覚的にふまえている。M即Oとしてこれを未分にしている者は、疑うことがなくすべてを受け入れる。うそも誤りもすべて真とみなして、与えられるものをそのままに受容する。疑う者、信じる者は、Mは、Oに一致している真実かもしれないし、一致していない虚偽かもしれないと、両者を分離して、二重化しているのではなくてはならない。M即Oとこれをひとつに未分にしている子供においては、うそも誤りもなく、すべてはそのままに受け入れられる。疑うこともなく、したがって、信じることもない。MとOを区別し二重化してはじめて、「うそか本当か」と疑い、したがって、「本当だ」と疑いをなくして信じることも可能になる。この二重化は、信じるという能力の存立のために不可欠の前提になる。

ひとの心のなかには、直接には知ることができない。ひとの言動としての情報を通して、これを

媒介にして、われわれは、それにせまることが可能となる。その言動(M)をもって、その内心(O)を信じる。否定的には、その言動によって、内心は隠され、偽られることともなる。未来とか、超越的な世界は、直接には知ることのできない世界として、根本的に、信じられる世界となる。明日のことは、未だ来たらぬ世界として、人知にとり、かならず無知にとどまり不可知にとどまるものがある。そういうところでは、知にかわって、信が登場する。「明日、会おう」という友達の約束は、明日になったら、その真偽を知ることになるが、それまでは、不可知である。その友の言葉・約束を信じることができるのみである。それは、信じるものであるとともに、疑えるものでもある。その言葉(M)は、明日のこと(O)を隠し裏切っている言葉になるのかもしれない。信じられるものは、不可知・無知にとどまっているものとして、同時に疑われるものでもある。こういう場合、全知全能のものは、あらゆることを知るものは、知っているのであるから、信じることも疑うことも不要である。信仰者は、神を信じるが、神は、敬虔なかれらを信じることはない。未来のことも周知の神は、すべてお見通しである。知ることのできない者のみが信じるのである。

信・疑不成立のこどもの場合も、この全知の神に似た状態にあるのではないかと筆者は思う。こどもは、言われた通りをそのままに受け入れるのだから、いま耳にした情報(M)と、その指し示す明日の約束達成(O)は未分化である。MとOの二重化がなく、M即Oである。MとOが区別されないかぎり、疑われることがなく、したがってまた、疑いを停止して信じるということもない。子供は、無知について無知なために、無知を知らず、神とともに全知を誇る。したがって、かれらは、信じることを必要としない。これに対して、大人は、無知について知っているから、信じるのである。無知のものについては、知りえないのであれば、信じる以外ないのである。

遠くの重病人が電話で「あす、会いに行く」と約束するとき、大人ならば疑い、そして、根拠が見つければその悲壮な思いを信じる。だが、幼児ならば、なんの疑いもなく受け入れるのみであろう。かれには、M(約束すること)とその背後あるいは彼方にある未知・不可知のO(明日会うこと)の二重構造がなく、M即Oである。ここには、Mとちがうその背後の不可知・無知のもの(O)がなく、知らないもの(の自覚)がないので、おのれの世界について全知の主観的状态であり、神と同じく、すべてを知っていて、信じることも疑うこともないというべきであろう。だが、神とちがい、明日になると約束ははたされず、その重病人は会いに来ず、「うそ」を知ることができる。M即Oでないこと、両者の間に距離・区別のあること、つまり二重化を学習していく機会があたえられる。しかし、それらを反省させて無理をして懐疑のこころを育てることはない。そんなことをすると、猜疑心のつよい、不信の人格をつくることになりかねない。

ところで、神の世界は、われわれには信の世界である。超越界は、われわれには直接的には知られることのないもので、信者は、神(O)と、媒介する者(M)をもって、結ばれるのみである。

場合によると、媒介するものとしての聖職者とその言葉は、ひとと神を分断している可能性もある。他宗派の聖職者は、そう見なされるのが普通である。さらに、S-M-Oは、Sが神にかかわる聖人、Mはこの聖人に直接的な靈感とか神的諸情報、Oは神ということでもある。ここでは、Mが微妙なものになる。これをOの現われととらえるか、単なる幻覚・妄想とみなすかということで、まったく異なったものになる。こころの中のこと(O)が表現されている言葉(M)の場合でも、この言葉がはたして、心中(O)に一致しているのかどうか常に問題となるが、神の情報(M)の位置付けでは、さらに、心中の表現ではあまり問題にならないOの存在自体が問われる。神を見たりその言葉を聞くというひとは、たしかになんらかの情報(M)をもつ。直接的に声が聞こえ、神聖なものが直接見えているのであろうが、この情報(M)は、当人に直接的だとしても、それがなにの情報になるのかは、直接的には分からない。それを神からのものとするのは、想像であり、推量でしかない。M即Oとする子供の場合は別だが、MとOを区別し二重化して、このOを信じるという場合には、つまり、神を信じる者にとっては、信じられる対象としてのOは、本来的に隠されていて不可知・無知にとどまる。身近な存在であれば、或る程度は推定可能だが、そうでないものの場合まったく見当もつかないことになる。したがって、その所与のMの解釈も、そのOの想像によって、まるで異なったものとなる。そのOは、自分の心のなかからささやいているものなのかもしれない。Oを無意識的な心性とみなしMをその聖なる声とするか、あるいはMを単なる幻想や錯覚とみなすか、Oを世界をささえる根源的超越的な聖なる存在とみなすか、ひとによってまったく異なった捉え方がされることになる。

5. S-M-Oの省略形(S-M、S-O)

われわれは、信じるということ「S-M-O」(信じる者S-媒介する情報M-指し示される対象O)のかたちにして表現するとは限らない。「S-M」、「S-O」に(さらには、主語Sもよけいといえよけいであり「Mを信じる」「Oを信じる」としてもよい)と省略形をつかうこともしばしばである。オルフェウスの例でいうと、「S-M」とは、「オルフェウスは、ハデスの言葉を信じた」ということであり、「S-O」とは、「オルフェウスは、エウリュディケーがついてくるのを信じた」ということである。それでも、信は、MとOの区別を自覚し二重化しているものとして、根本的にはS-M-Oになることに変わりはない。この二重化がないと、つまりは、与えられている情報Mは、無知・不可知の対象Oに一致していないかもしれないというような懐疑をふまえていないと、この懐疑を停止して、「やはり本当だ」と信じていくことにもならない。

S-M-Oだというのが、「彼が活着していることを信じる」というような場合、S-O(対象・事柄)のみでM(媒介項としての情報等)はないではないかといわれるかもしれない。しかし、こういう場合でも、信じるというこころの仕組みのもとでは、Mはその表現が省略されているのみで、実際にはあるものと筆者は考える。「彼が活着しているのを知っている」とか「彼が活着しているのを

見た」というのであれば、それは、主観Sがその対象となるものOを直接的に「知る」「見る」となって、媒介的なものMをもたなくてもよい。だが、それと同じようにして、「信じる」とは、いえないのではないか。信じるもの(対象)は、見知るもの(対象)とちがって、直接的には与えられていない。直接的には見知ることができないから、信じるのである。「彼が活着ているのを信じる」というときには、「見る」ときのように対象を直接に目の前にしているのではない。本当は死んでいるのかもしれない。安否が不明だから、願ひもこめて、活着ていると「信じる」のではないか。ここでは、直接的には知られていないOつまり「彼の安否」に関して、このOを指し示す、直接的に与えられている情報(M)を陰に陽にふまえているのが普通であろう。あるいは、「彼は活着ている」のだろうか「死んでしまった」のだろうかと思像図を描いて、「活着ている」という考え(つまりはM)の方をとって、「これが真実だ、本当だ」と信じ受け入れるのではなからうか。彼の安否についての情報や思像図から、「彼は活着ている」という情報・想像・考え(つまり媒介としてのM)を取り上げて、これが対象世界Oに一致している、真実に違ひないと受け入れるということである。「彼が活着ている(O)という考え・情報(M)を本当だと信じる」というのを省略したものが「彼の活着ていることを信じる」になるとみなすべきであろう。

あるいは、S-M-Oというが、「彼を信じる」という場合にはMがあるのみで、Oとなるものはないのではないかとされるかもしれない。この場合は、「かれの言動を信じる」ということであろうが、その言動を「見る」「聞く」「知る」のならば、背後に別のなにかを前提することはない。しかし、「信じる」という場合、かれの発言のその内容そのもの、指し示す事柄をふまえて、それにかれの言動が一致している、真実であるに違ひないと信じるものではないか。信じることににおいては、直接には知りえない大切なものごとのあることが前提されていて、かつそれを指し示す直接に所与の言動があり、この言動を、指し示す通りにちがひないと受け入れるのである。彼のいうことMは、その指し示すものOに一致している、真実だ、と受け入れるのが信じるということであろう。あるいは、恒常的に、かれは、真実を語り、約束を守るひとで、その言動Mは、常に、真実であり、その指し示すOに一致し、約束を実行するひとだということであろう。かれの言動Mを信じるというときには、それを「見聞きする」とちがひ、その背後に、そのMによって指し示される、信じられるべきOを想定して、Mは、Oに一致している、まちがひないと信じるのである。やはり、正確には、M-Oの二重構造をもっていて、S-M-Oになるということができるのではないか。

ところで、「S-O」の「O」即ち、信じる者にとって不可知・無知の肝心かなめの対象については、「エウリュディケーを信じる」というようにはいいにくい。こう表現した場合は、「S-M(媒介的情報)」になる。つまり、エウリュディケーがいうこと・約束することを、たとえば、「私は必ずついていきます」というような内容「O」をもった「M」(情報)となる。信じる者に直接的な所与である情報・言動(M)があり、その「叙述」の内容が、隠された不可知のもの(O)

をなすというのが信の構造になるからであろう。「O」は、「叙述」の形式をとるのが普通になる。そのために、叙述ではなく、「エウリュディケーを信じる」のように「エウリュディケー」という単語のみでは、信じるものに所与の情報としての言動(M)にみなされてしまうのであろう。所与の情報(M)とそれが語り指し示すもの(O)の区別である。

「神を信じる」というようなときもそうである。これも、このままでは、どちらかというところ「S-M」にみなされ、「神」は、「M」として、神が約束することとか、神からの言葉・情報を、たとえば、「最後の審判が下される」(O)という「神の言葉」(M)を「信じる」というように解される。もし、「神」そのものの存在を信じるのであったら、「神があることを信じる」とか、「神の存在を信じる」というような、叙述内容をもち、情報(M)ではないことが明らかになるような形にしなくてはならないのではないかと思われる。

しかし、ふつうにはM(媒介的信息)にはならないようなO(対象)の場合、または、MかOかの区別が明確な場合は、叙述の形式をとらなくても、つまりは単語のままでも、よいことになる。例えば「UFOを信じる」というときには、神とちがって、UFOは、Mという言動の発信者にはならないのがふつうなので、Oと捉えられ、「UFOが語る情報Mを信じる」のではなく、「UFOの存在を信じる」という意味になる。

S-M-Oにおいて、MとOの一致、つまりMの真実であることが、信じるところにはいわれるわけだが、少し例をあげて、これを見ておこう。S-Mつまり「私は、この子守りを信じる」とか、「私は、あの医者腕を信じない」というが、これらを、さきあげた「Sは、OについてのMを信じる」の定式のもとで理解してみよう。いずれの例も異なった複数の意味をもつ。

前者の例では、ひとつには、こう考えられる。「私は、私のこどもへの昨日の子守りについて、そのベビーシッターの言うことを信じている」ということである。もうひとつには「私は、明日の子守りのことについてベビーシッターの言うこと・約束を信じる」というものになる。MとOの同一性は、前者「昨日」の場合は、M(ベビーシッターの言うこと)は、O(昨日の子守りの本質的ことから)に真に一致しているということであろう。

しかし、後の「明日」の場合には、同一性は、少し異なってくる。それは、動的になる。明日の子守りのあり方は、まだ、決定されておらず、変更可能であり、O(子守りすること)へと、M(ベビーシッター)が、その同一性を積極的に実現していくものになる。「昨日」の場合は、MとOの同一性は、すでに客観的に決定済みだが、「明日」の場合は、なお、未決定で、「明日」のベビーシッターは、その振る舞いをこれから変えられる。約束は破られることもある。彼女は、「私への信頼はとても低い。彼らは、私の子守りを疑っている。よし、私は、明日はあの子をいじめてやろう」とか、「私への信頼は、とても大きい。だから、私は、これにこたえなくてはい！」と色々考えることができる。彼女が心の中で考えを変えたら、彼女への信頼は、あるいは、疑いは、誤りとなる。

もう一つのS-M、「私は、あの医者腕を信じる」という場合は、「S-M-O」のもとで、どう理解できるであろうか。単純なふつうの場合は、こうであろう、「明日の手術の結果は、いまは分からないけれども、私は、成功を信じる、あの医者腕は、いいという評判だから」と。つまり、Oは明日の手術の成功、Mはその医者の評判になり、MとOの同一性は、「彼の評判が、まだ分からない明日の成功に、一致している」、そう願いたいということになる。不可知の事実が過去のばあいは、Oは、われわれには知られていない、その医者の過去の手術になり、Mは、われわれに周知の現在のかれの評判となる。つまりは、「私は、彼の過去の手術について、その評判のとおりと信じる」ということである。

いずれにしても、信の認識上の構造は、二重になっており、本源的に、隠された肝心のことから(O)と、その情報(M)とからなるといってよいであろう。Mは、信じる者が知ってはならない、あるいは、知ることのできない肝心な事柄(O)の情報である。MとOの一致は、信のもとにある限り、知られていないのだが、信じる者は、一致していると信じるのである、つまり、Mの情報を真実と信じるわけである。

6. 嘘でなく、真実のみを信じる

信じるとは、与えられた直接の知・情報が、その指し示す情報内容としての隠され無知にとどまっている肝心かなめの事柄に一致している、つまり真実であると、これを受け入れることである。オルフェウスの信は、「エウリュディケーがついてくるという肝心かなめの、しかし知ってはならないことについての、ハデスのことば・約束が真実である」と信じたのである。ひとが信じるのは、真実である。うそ・誤りを信じるものではない。

だが、ときに、「あの人が死んだというのは、うそにちがいない、間違いだと信じている」ということがある。ここでは、あたかも「うそ」「誤り」を信じているかのようである。しかし、信じるという態度は、本来的に、「受け入れる」ことを基本とするもので、ひとが受け入れていくのは、真偽でいえば、真になり、偽は、うそや誤りは、排除されるのが一般であろう。「間違いだと信じている」というのも、「間違いやうそを信じる」ということではないのではないか。つまり、「死んだというのは、間違いだ、生きているというのが真実で、この真実を信じている」、あるいは「間違いだという考え・情報の方を真実だと信じている」ということなのではなかろうか。

M(情報)がO(事柄)に一致しているのが真理・真実であるが、この場合、Oは、本来的には、このMから独立している、信じるものが求めている肝心かなめの事柄である。それをMという情報が的確に捉えていて、このMは、本源のOに一致していて真実であるとか、不正確で一致していない、誤りであるとするのである。誤った情報Mは受け入れても意味がなく、これは排除される。Oを的確に捉え表現している真実を示すであろう情報Mの方を受け入れて信じるということになる。信じられるものは、真実として信じられるのである。

MがOに一致して、真実であるとみなされるならば、信じて受け入れられる。一致していない、うそ・誤りだとみなされたものは、信じられないものとして、排斥・拒否されるということになる。「知る」場合は、「うそを知る」「誤りを知る」というようなことがいえる。しかし、信じる場合、うそや誤りである情報Mは、Oに一致していないということで、排除され、信じられないものとなるのである。うそや誤りは、うけいられる場合、「それが虚偽であるという情報Mを、真実として信じる」となり、あくまでも、真実として受け入れるのが信じるということになるように思われる。信じるという働きは、もともと、情報Mとその指し示すものOについて、両者は一致していないのではないかと二重化して懷疑するところにはじまる。そして、一致している、つまり真実に相違ないとみなして懷疑を停止して受け入れるのが信じるということになり、したがってまた、一致していない、うそ・誤りだとみなされたものは、信じられずに拒否されることになるのである。

ただし、もとのOに一致したMといっても、それが真実と分かっているのなら、そう捉えて知るのみで、信じることはない。一致しているにちがいない、真実にちがいないと、信じるのである。つまり、正確には、「真実を信じる」のではなく、「真実として信じる」ということである。われわれは、ふつう、信の対象は、真実である、真実が信じられるのだと考えている。しかし、正確には、これは正しくない。「信」の対象からは、単にうそが排除されるのみではなく、真実もまた排除される。真実と分かったものは、信じられるものではなく、見られるものであり、端的に知られるものとなる。信の対象は、疑うことのできる不確かな隠された物事になる。プラトンやカントが知のあり方のうちで、「信」を一段低いところに位置付けたのは、その意味では、正解なのである。知ることができず、分からないから、信じるのである。われわれは、真実を信じるのではなく、不可知で疑われうるものを、真実として信じるのである。真実と分かっているものは、そう認識して、これを知識として受けとめるまでのことである。信じる必要などない。信じられるのは、なお、真実と認識されえないから、「嘘かもしれない、だまされているのかもしれないが、本当だろう真実だろう」と、受け入れるのである。つまり、「真実を」信じるのではなく、「真実として」信じるのである。J. ロックは、信じるということについて、それは、信じるものを「真実として (as true) 受け入れる」ことだといっているが (John Locke; *An Essay concerning Human Understanding*. Book IV. Chap. XV.3.)、そういうことである。

なお、MとOの一致つまり真実は、未来のこととか、心中のことといった信じることが肝要となる領域においては、客観的な事柄Oと主観的な情報Mとが一致している、一致していないというかたちでは単純に決められない点に注意する必要がある。「明日、会うと約束した」彼を信じているという場合、現在の言動・情報(M)と、明日会うという事柄(O)では、Oよりも、Mに重点がある。MとOが一致するかどうかは、M次第ということになるからである。Mが真実であるかどうかは、まだ、決まっていないのであって、Mの担い手しだいで、真実とも虚偽ともなり

うる。信じるという態度は、この場合、そのMの担い手が、Oになるようにと意志を持続し、一致を実現してくれることを、いまだ存在していない動的に生成する真実を信じるわけである。

さきに、「S-M-O」の省略形として「S-M」「S-O」をあげたが、「S-M」における「信じられる真実」とは、Mが中心になって、隠されているOにまちがいなく一致しているとか、あるいは、これからMは、まちがいなくOを実現していくと、真実をあらわすMに焦点をあてた省略形になるのであろう。「S-O」は、MよりもOが関心の中心になり、Mは、端的にOを表現しこれに一致していて、真実Oが信じる者の意識のうちでは前面に出ているというようなことになるのであろう。

ところで、真実は知られるだけで、信じられることはなく、信じられるのは、真偽不定のものが「真実として」受け入れられることだと本稿はいうのだが、つまりは、信じられる対象の知について、それが根本的に無知・不可知だというのが、これに疑問を呈するひともあることであろう。霊的能力にすぐれた宗教者は、神についての知的直観をもって、しっかりとこれを知っている、神の知をもっているといわれることがある。だが、真実と知られたものは、疑いを排除するとともに、信をも排除する。知っているものは、なにも信じることはない。真実と確定して認識できていないから、信じるのである。信じるところでは、常に、だまされ、うらぎられるということがつきまとう。嘘である可能性がつねにある。そういう不可知・無知にとどまらざるをえないものを、それが真実とも、虚偽とも知られえないから、信じるのであり、あるいは、疑わしいものとして、排斥するのである。

仮に、その神なり、仏なりが、真に知られえているものであるとしたら、それについては、信じる必要などない。目を見開いてこれを見ればよい、知ればよいのである。それを宗教的崇拝の対象にするとしたら、それは、信仰するのではなく、その崇高な神仏の世界を知って、これに帰依しその真知のもとに敬虔に生きることになるのみで、信じる必要などどこにもない。知られないものを、真実と認識されえないものを、したがって、嘘かもしれない、だまされているのかも知れないものを、あえて、真実であるとみなして、これを信じるのが、信じるということであろう。知りえないから信じるのである。

M(情報)とO(指し示される事柄)の一致を、つまり真実をどこまでも知性は追及する。その検証のために、その確実性を求めて、知性のいとなみを展開していく。情報を懷疑しその正しさを検証していく。そして、できることならば、直接的に知ることをもとめる。ありのままを、直接的に確実に把握しようとする。それが知性の本来的な営みである。だが、われわれの世界には、根源的に不可知のもの領域がある。ここでは知は無能となる。未来のこと、ひとの心中のできごと、あるいは超絶的な神の世界などが、それである。それらは、どこまでも、不可知・無知にとどまらざるをえない世界である。未だ生じていない未来の世界は、未だないのだから、それを確実に直接的に見知ることはできない。未来には、知りえないものがつきまとう。知りえな

いがゆえに、信じられるのである。知の限界を自覚して、信は登場する。根本的に無知にとどまらざるをえないものは、いくら知性を働かせても、知ることはできず、あれかこれかと臆測して迷いつづけるのみである。不毛な懷疑からぬけだせない。これにとどめをさして、真実として受け入れる決断をするのが、「信じる」ということではなかろうか。

この点からいうと、信は、知のあとに成立する。プラトンやカントの位置付けは、信が不確定である点からは、あれでよいが、人間知の限界という方面からいうと、知の飛躍、知の昇華というようなことからいうと、逆に、信は知のうえにあるとみることができる。ひとは、ホモ・サピエンスとして、どこまでも、知性的活動をつづけていく。だが、人知のおよびえない限界がある。本源的に無知・不可知にとどまる世界がある。そこでは、知は、無能である。このときひとは、知的な懷疑の堂堂巡りの不毛な活動からぬけだして、知のぎりぎりを乗り越え昇華させて、「信じる」世界を展開していくのである。こういう知の展開のあり方からいうと、つまりは、知りえないがゆえに信じるということからみていくと、知性の営み、疑う知性のあとに、それをあえて停止して、高度な信の世界がそびえることになるというのではなかろうか。この点からいうと、人口に膾炙されたカンタベリーのアンセルムスのことば「credo, ut intelligam (知らんがために、信ずる)」は、言い得て妙である。われわれの知は、有限であり、より高い知をもとめるためには、信へと飛躍していかななくてはならないといったのである。

The Epistemological Double Structure in Belief

— Trust and Belief as the Back of Information Society —

Yoshiki KONDO

Trust or belief is important for social life. The bank that lost social trust, may go into bankruptcy, for nobody deposits money in this bank. What is the trust or belief? I define it as to accept without doubt the information concerning unknown important matter.

In belief there is an important matter that is not known directly by our believer. Concerning this unknown matter, we aware its existence and eager to know it directly. But we cannot know, so we must believe. We usually say that knowing and believing oppose each other. In belief at least there must be the ignorance about important believed matter. Already known fact must not be believed, for it is positively known.

In belief or trust we have the information that is given us directly. This information informs us about essential matter that stays as ignorant for us. Believer can know indirectly that important hidden matter only by the directly given information.

So in belief we have epistemological double structure. Our believer stands directly in front of the manifestation that is usually saying or doing of human being. And behind this manifestation or information, exists the ignorant essential object. Namely a belief has following three terms, believer (S)—directly known information (M)—unknown essential matter (O). The typical thesis is, "S believes the information M concerning hidden O".

Believer accepts or receives the content of speaking that is not clear whether truth or error, as truth. It has the possibility of lie and also of truth. We always have the possibility to be deceived or cheated. Therefore in belief we must make up our mind to being deceived or to missing our expectation. We must decide to accept with our strong will the information as truth.